

第3章 「観光・地域振興に活用されている馬」

観光・地域振興

在来馬の伝統競馬を復活

対馬うま跳ばせ

地域おこしと観光に繋げる



事業の概要

対馬市上県町と地元有志が初午祭実行委員会を結成し、町おこしイベントの中心となる「馬跳ばせ」を平成14年7月に復活させた。イベント会場は目保呂ダム上流の公園である。このイベントが好評を博したことから、対馬初午祭は恒例行事となり、以後毎年10月に実施され、大勢の観光客でにぎわっている。本来、対馬方言では「跳ばす」は「競走する」の意味があるらしい。この上県町瀬田地区には明治時代から、男の子の初節句の行事である初午のお祭りで在来の対州馬による草競馬「馬跳ばせ」が行われていた。

イベントの内容

- 目保呂最年少ライダーによるジムカーナ
- 初午祭り騎手による部班演技
- トーナメント戦（予選・準決勝は午前、決勝は午後）
- ジャンピング（障害飛越）
- 流鏝馬（2的、風船割および商品当て）
- 乗馬体験（丸馬場内）
- 軽乗パフォーマンス（目保呂魔法の動物園）
- 初午儀式（対州馬子馬の命名式）
- がんばらんば対州馬レース（4頭×2レース）
- ウマとヒトのリレー競技
- 対馬ダービー（6頭一斉フィナーレ戦）

少年少女の対州馬騎乗、とくに、最年少ライダ

ーによるジムカーナや初午祭り騎手による部班演技、ジャンピングや対馬ダービーでは、年少者や生徒が堂々と馬を御す姿は、ほほえましさとともに頼もしさを感じさせ、大きな声援が贈られた。



未来を感じさせる子ども達が中心のイベント。トーナメントやダービーなど一連の対州馬による競走も勇壮でエキサイティング。魔法使いに扮した少女によるユーモラスな軽乗パフォーマンスも。

運営体制等

上県町と地元有志による初午祭実行委員会がイベントの準備、実施に当たっている。このイベントの成功には、福岡市内の乗馬クラブ「乗馬クラブ・ルヴァート花畑」の徳永真治氏が果たした役割が大きい。馬跳ばせイベントを企画した当初、島内には騎乗できる対州馬がほとんどいなかった。「乗馬クラブ・ルヴァート花畑」では、対州馬を乗馬で供用しており、協力を依頼されたクラブの代表である徳永氏は労を惜しまず、(公社)日本馬事協会や(公社)全国乗馬倶楽部振興協会などの馬事関連組織と連携をとりながら、目保呂ダム河川敷の整備、馬事公園(厩舎など)の設置をはじめ、調教師の招聘と対州馬の乗用馬生産を行い現在に至っている。また、年少者の騎乗技術をこうしたレベルにまで高め、同時に安定して従順な乗馬を育成した調教師篠原由美恵氏を始めとする関係者の協力と努力が実を結んでいる。

背景(地域連携、展望等)



リアス式海岸が多い対馬の景観

対馬は九州の北方、玄界灘に浮かぶ島で、行政区分では長崎県に属する。実際には100以上の属島がある対馬列島である。総面積708.5km²の大半を占める主島の対馬島(696.1km²)を対馬と呼ぶ。対馬海峡は暖流の対馬海流が流れ、気候は年間を通して比較的温暖で雨が多い。海岸線はリアス式海岸で入り組んでおり、標高200~300m前後

の山地が全面積の90%近くを占め、傾斜地が多い。

人口は昭和35年の6万9,556人をピークとして減少傾向にあり、平成22年の統計では3万5千人を割っている。

対州馬について

対州馬は体高107~136cm。雄は平均127cm、雌は125cm程度とされる。戦前は3,000頭あまりが島内にいたとされるが、平成18年の地元紙の記事では対州馬の飼養頭数は26頭で、所有者の内訳は、振興会8頭、対馬市12頭、個人6頭であり、「あそふベイパーク」と「目保呂ダム馬事公園」で、それぞれ6頭ずつが管理されていた(平成26年時点での対州馬総数は34頭)。



放牧中の対州馬

目保呂ダム馬事公園の厩舎内部は明るく、掃除も行き届き、よく管理された環境であった。

関係者が指摘するように、子孫を残すための種雄馬の頭数がごく限られており、その点で他の在来馬と同様に対州馬の生産も真剣に考えなくてはならない時期にきている。現在、対州馬保存会などが中心になって対州馬の増産計画を検討しており、馬の利活用域を拡大するとともに、繁殖計画、飼育の担い手の養成等、積極的な取り組みが期待されている。

.....
〒817-1523 長崎県対馬市上県町瀬田目保呂ダム馬事公園 (TEL)0920-85-1113